

青木 裕次

奨学金

先 日の朝日新聞に「新聞配って自覚 前向きな生き方」と見出しを付けて、首都圏の朝日新聞販売所で働きながら大学などを卒業した朝日奨学生の卒業祝賀会のこと載っていました。300人ほどいる奨学生を代表して「これからの人生で辛いことがあっても雪が降った日にも配達したことを思えば頑張っただけ」と挨拶したのが女子であったことにも、私は胸を熱くしました。そういえば、私が高校生

の時、この朝日奨学生で大学に行った同期生がいたと記憶しています。この奨学金は返済するものではなく、周知のように新聞配達等で働いて大学に行く仕組みになっています。

現 職時代、教育委員会事務局を経て十八年振りに学校現場に戻った時、様々なことに、そうだったと気付いたり思い出したりしました。その中で奨学制度について、以前と様子が違うことに少しばかり驚くと同時に、疑問も感じました。私達の学生時代には、奨学金を貰う為には、ある程度成績が良くなければならなかったのですが、その学業成績のハードルが低くなっていくように感じました。先生方も、積極的に奨学金を受けて大学や専門学校に行くように手続きをしていくように思います。生徒達が希望する進路に進めるようにすることは、教師の大きな努めであることを考えれば、それは当然のことでしょう。しかし、名前は奨学金ですが返還しなければならぬという点では、借金であることに間違いありません。それも何百万という金額です。十代の生徒達が、多額のお金を借りると言うことに、どれだけの自覚があるか、そこが不安に思えました。

昨 今、奨学金の返済にあえいでいる大学生や社会人のことが頻繁に話題になっています。自己破産をする若者もいるという報道も耳にするようになりました。今、奨学金の制度を見直す方向にある様で

すが、生徒を社会に送り出す教師としては、彼等の将来もしつかり考えることが一層求められます。

実 は私も大学院時代に奨学金を受けていました。その時代は、教職について一定の期間勤めると奨学金の返済が免除されるといふ制度があり、私は奨学金を返済しなくても良かったのです。当時は、今と違って大学院に進学する学生は、各学部で毎年一人か二人でした。大学まで行かせて貰っただけでも有難いのに、その上に進むことは、親の負担を考えて躊躇しました。その時、研究室の教授が、私を奨学生に推薦して下さったのです。その時も大学時代の成績のハードルは高かったように記憶しています。

退 職時に私は定時制高校に勤務していました。午前部、午後部、夜間部の三部制を数く学校でしたが、各部で生徒達の意識や雰囲気も大分違っていました。夜間部の生徒達に苦労人が多かったように思います。その中に、朝早い時間帯から野菜や鮮魚・精肉などを商うスパーで働き、夜間部に通っている生徒がいました。彼の進路希望は推薦で専門学校へ進学することでした。その入学金を、自分の貯金で賄った生徒です。その生徒が卒業前に自動車の免許を取るため教習所に通うことになりました。その費用も自分で出すことにしていたそうです。しかし親は、そのお金だけではどうしても自分達に払わせてくれと言ふことで、そうしてもらったと彼が話していました。推薦で進学する生徒に、私は校長室で校歌を歌うことを義務付けていました。推薦希望の生徒達は皆必死で校歌を覚えて来て歌ってくれましたが、件の生徒が一番大きな声で清々しく歌ってくれたように思います。

(元青森県立北斗高校校長)